

誤謬性の投影

— Under Western Eyes に関する一考察 —

諏訪間 裕子

I

ラズモフ (Razumov) が「救い難い人間の誤謬性」 (invincible nature of human error (3巻4章)) と呼び、コンラッド自身も手紙の中で「絶えざる過ちへの傾向」 (our persistent leaning towards error) と述べているような「人間の過ちやすさ」は、ラズモフの悲劇における特殊な背景を形作っている。ラズモフを突然襲った一つの間違った信頼は、彼の悲劇の発端を作るだけでなく、ちょうど波紋のようにラズモフの回りに広がっていき、彼の内面とは相いれない喜劇的素地を持つ「間違いの社会」を作っていった。ラズモフの精神内部が自分の犯した過ちを深く意識すればするほど、それを囲む「間違いの世界」は、人物たちへ、語り手へ、そして読者へとその触手を徐徐に伸ばし、ラズモフの内面とは矛盾した世界を拡大していく。このようなラズモフの内面 (reality) と外面 (appearance) の矛盾が、時にはアイロニーによって、読者に対して遠い距離を隔てて描かれ、また時にはその矛盾が読者の心の中にまでおし寄せてくる描き方は、この悲劇をいっそう複雑にしているが、そこには drama として描こうとするコンラッド自身の努力も見逃すことはできない。

帝政ロシアの専制政治の高官を暗殺してきたハルディン (Haldin) は、自分の逃亡を助けるべき信頼に足る人物としてラズモフを選んだ。自分の研究と将来にのみ関心を持っていた自己中心的なラズモフの、革命家への「沈黙の軽蔑」を、ハルディンは感情の高潔さや道德的強靱さからくるも

のと軽率に誤解していた。この一つの間違った信用は、ハルディン自身がラズモフを評した「汚れなく、気高く、孤独の人」("unstained, lofty and solitary existence")という言葉を通して、妹のナターリア・ハルディン(Natalia Haldin)や革命家たちへと連鎖的に伝えられていく。こうして作られた「間違いの世界」では、話し合った末に信頼を得るのではなく、沈黙がすなわち盲目的信頼を誘発してしまい、言葉は人間同志の意志の伝達という役割を完全に棄て去っている。語り手である語学教師の「私」が、「大変よく仕込まれたおうむのように、自分のしゃべっていることが本当はわかっていないのではあるまいかと思わずにはいられないような熱心さで、言葉を吐き出そうとする」(1巻)と語っているように、ここでの言葉は、「真実に対する大敵」(great foes of reality)となってしまうのである。

この「間違いの世界」では、ひとりラズモフへの誤解だけでなく、他の人物同志の誤解も様々な形で見いだせる。ハルディンはラズモフを底に深い考えを持った信頼できる男として、逃亡の援助を頼んだが、そのとき貸そり屋をしているジーマニッチ(Ziemianitch)をも、「輝かしい魂だ。堅固な男だ。ペテルブルグ随一の馭車だ」("A bright spirit / A hardy soul / The best driver in St. Petersburg")と称賛していた。しかし実際は、ラズモフがハルディン逃亡用のそりを廻すように連絡しに行くと、この「輝かしい魂」は大酒を飲んで酔いつぶれていて、その任務を果たすことなど到底できない状態であった。ここにも、「間違いの世界」を作る「信頼の愚かしい表現」(unwise display of confidence)が、人間の過ちやすさを裏づけている。また、革命家たちに「feminist」として認められているピーター・イヴァノヴィッチ(Peter Ivanovitch)も、実際は女性を品物と同様に思っている女性虐待者であり、また金持の未亡人にとりいる寄生的人間であった。しかし、最後まで革命家たちはこ

の「革命家の英雄」の本質を見抜くことができず、女革命家のソフアイア・アントノヴナ (Sophia Antonovna) でさえ、「ピーター・イヴァノヴィッチは靈感を受けた人です」 ("Peter Ivanovitch is an inspired man") と言って、「間違いの世界」から抜け出すことができない。間違いの外にいて、彼らの真実を知っている読者に対しては、'a bright spirit', 'feminist', 'an inspired man' などの言葉は verbal irony の効果を持っている。コンラッドが「前書き」で、「この小説におけるほど超脱の努力を求められたことはなかった」と述べているように、⁽¹⁾ 作者は常に嘲笑的 detachment をもってこの世界を見ているので、読者の眼にも間違いの世界はいつそうアイロニカルに映るのである。

この世界の人物たちの共通した特徴は、お互いに意志の疎通を欠いている点であろう。それぞれが他人を意識しないことによって、人間性を失うという過ちを犯している。互いに相手に無関心で、相手を一つの仮面を被せて見ており、仮面の向こうの素顔を見るための努力をしようとしめない世界である。ここでは、ラズモフ以外の人物はみな一様に、外面から描かれている。テクラ (Tekla) やソフアイア・アントノヴナの苦しかった身の上話が彼女らの言葉で語られることはあるが、その場合も人物たちの心の苦しみへと掘り下げられてはいない。これも外面的描写の領域に留まっているといえよう。人物を外面から描くアプローチは、人間同志の心理的交流の欠除と相まって、ラズモフの回りにいつそう濃い errors の世界を作る効果を持っている。人間同志が互いに誤解して相手を評価していき、その間違いが次第に大きくふくれあがり、遂に二つの矛盾した意図がぶつかり合った時、そこには喜劇的局面が約束される。

この小説が間違いの世界だけで作られていて、人物たちの誤解や目的のすれ違いを読者がただ傍観するように仕組まれているだけのものだったら、これは間違い続きの喜劇であろう。しかし、このような間違いの世界に巻

き込まれた一人の人間ラズモフの精神内面の描写も同時に描かれている。間違いの世界によって喜劇的場面が構成されるが、二つの相反する意図がぶつかり合い、一方はその間違いに気づかないが、他方のラズモフの心理にその誤解の影響が見つけれられるとき、この場面は一転して喜劇ではなくなるだろう。喜劇的素地を持つ故に、いっそうラズモフの悲劇は読者の胸に強く響くことだろう。この小説では、ラズモフの内面は、間違いの中の真実、仮面の中の素顔、夢の中の意識 — 喜劇の中の悲劇的中心となっている。

II

自分の意志に反して巻き込まれた「間違いの世界」に対して、ラズモフは意識を持って理性で立ち向かおうとしている。ハルディンへの裏切りを自分の意識に対して正当化しようとする一方では、自分の精神内部には決して「間違い」の呪いがかけられることはないという確信を持っている。

彼はあらゆることが完全に間違っているのを見て、内心ほくそえんでいた。一人の犯罪を犯した理想主義者の自己欺瞞が晴天のへきれきのように降ってきて、自分で勝手に破滅していったかと思うと、その反響の鳴り響く中に、ばか者どもが間違った臆説を作り上げたというわけか。……これは危険ではない。それどころかむしろこの方が有利だ。悪意のある幸運だ。(3巻3章)

「革命の呪い」(revolutionary curse)にかけられて彼を誤解している者たちを見て、ラズモフは自分にとって利益になることだと思い込もうとしているが、次の瞬間に "Was it not strange?" という rhetorical question を自分自身に投げかける。この問によって、ラズモフの外界と精神内部はすでに一つの接触を意識しているのである。

ここで、T将軍、K公爵、コスチャ、テクラなどラズモフの外の世界にいる人々が、彼に対して決まりきったように言う「ラズモフは信頼を起こさせる人物だ」("Mr. Razumov inspires confidence")という言葉を考えてみよう。'inspire'はN.E.D.によると、"To infuse some thought or feeling into (a person, etc.), as if by breathing ; to animate or actuate by some mental or spiritual influence"となっている。そしてこの言葉は予言などに用いられることがあるという。このことから考えると、"Razumov inspires confidence"という言葉は外の世界の軽薄な信頼を示すだけでなく、ラズモフに対する errors の世界の呪文の役割をしていると言えないだろうか。ラズモフ自身が無意識のうちに何度も心の中で繰り返す「俺は人を信頼させる能力がある」("I have the gift of inspiring confidence")という言葉は、自分ではそれと気づかぬうちに、彼が errors の世界の呪いにかけていることを暗示している。そして「悪魔の呪い」(devil's curse)を「吹き込まれた」(inspired)ラズモフは、常に息苦しい思いをしている。

虚偽の息苦しい煙がのどをつまらせた。新鮮な空気を吸って元気を回復する望みもなく、この汚れた空気の中でいつまでももがき続ける運命かと考えて。(3巻4章)

こうして、ラズモフは裏切りを決意したときのように「過ちの世界」を客観的に蔑視できなくなってくる。このことは、ラズモフの心の中にも次第に「間違いの世界」が浸透しつつあることを示している。間違いの中にあっては、'Razumov'という言葉の意味する「理性」もその本来の力を失ってしまう。彼は自分の人生を追い詰めた抗し難い力に向って次のように言う。

運命だ。それともこういうことを愚かしいこととして軽蔑すべきなのか。いや違う。それは間違いだ。俺は何にしろ軽蔑する余裕はない。一つの愚かしいことが最も危険な紛糾の糸口となることもあり得るのだ。それからどうやって身を守るかだ。……知性のある人間ほど愚かしいことを疑わなくなる。(3巻1章)

「愚かしいこと」(absurdity) — この悪魔の呪いは人間同志の意志のすれ違い、無関心さなどによって、いっそう強力になり一個の人間を破壊する力を持っている。この力に捕えられたラズモフは、いたずらに自分の無能を意識せずにはいられない。

ラズモフは自分の人生が、何か神秘的な方法で危険におとし入れられ、精神の支えがひとつひとつはずされていくのをはっきりと意識した。

(1巻3章)

しかし、ラズモフが間違いの「抗し難い力」に支配されてはいるが、なおも自分を意識し自分の真実を見つけようとする姿を、語り手は暗示的に次のように描写する。

しっかりと頭を上げているのだが、彼はちょうど夢遊病者が自分を危険な場所に追い込んでいくその夢の中でもがいているような表情をしていた。(4巻2章)

ラズモフの意識に次第に入りこんでくる間違いの世界の呪いは、彼の心の近くまで迫っていく。作者自身がラズモフを「憐れみをもって扱った」と書いてるように、⁽²⁾読者とラズモフの心との間隔が非常に近くとられてい

る。「間違いの世界」に対しては客観的アイロニーの姿勢をくずさなかった読者も、ここでは、ラズモフの意識の動くままに彼の心に自分を一致させていく。そして、コンラッドは、彼独特のやり方で、ラズモフの心の中での二つの世界の矛盾というこの小説のクライマックスへと読者を導いていくのである。

III

ラズモフの「間違いの悲劇」を読者に効果的に伝える重要な役割をしているのは、語り手と時間の特殊な扱い方であろう。この小説の語り手は、物事を傍観している点で『チャンス』(Chance)のマーローと同じ態度ではあるが、ただこの小説では、「人間は無鉄砲な動物に作られている故に、たとえわずかでも彼の中にある好奇心が、すべての恐怖心、嫌悪の情、絶望さえも圧倒してしまう」⁽³⁾ というような「真実を積極的に求める心」を語学教師の「私」は失っている。語り手の「真実追求への意志」までも、errorsの世界では影の薄いものになってしまうのだろうか。「私」は人間の傍観し判断できる能力の限界を感じている。語り手は実際にはラズモフの手記を手に入れたから語っている訳であるから、全知に近い視点を持っているはずだ。それを「私」は放棄して、読者がすでに知っている知識に対して人物と一緒に手探りをしている。

あの軽蔑と焦燥の下には何かが隠されている。突然私は隠された真実に迫ったが……その真実とは何かはわからなかった。(2巻5章)

Douglas Hewitt はこれについて、「語り手に及ぼす効果は何の重要性もないし、それは恐怖や不理解以外に何へも導くことはない」⁽⁴⁾ と語っているが、むしろコンラッドは語り手の過度の客観性を意図して使っていると

思われる。

語り手が事件の核心に迫りながら主人公の心理を理解できずに間違った判断を下しているのを見る読者は、ドラマティック・アイロニーによって、ラズモフとの間に密接なつながりを保つことができる。これは、読者だけが主人公の悲劇を直視できるようにと仕組んだ作者の意図と考えられよう。

Albert Guerard がこの小説の視点について、「一人称の語りの一般的な利点の多くを失わずに、その可能性を広げようと真面目に努力している」⁽⁵⁾と述べているように、語り手が真実を知らずに鈍感に語っている事実は、読者にもう一つの利点を与えている。語り手の「あいまいな眼」、「鈍感な探索」は無意識のアイロニーとなって、ラズモフの運命を劇的に読者に伝える役割をしている。ラズモフがナターリアに彼女の兄への裏切り行為を告白しに来た時、「私」は二人の様子を見て次のように描写している。

彼の夜の訪問の重大さははっきりしている。……訪問の真の理由がおぼろげながらわかってきた。——彼は彼女を必要とすることを発見したのである。——そして彼女も同じ感情に動かされたのである。

(4 巻 3 章)

語り手は夜遅い訪問が何か重要な意味を持っていることは察知しているが、ラズモフがナターリアに「愛の告白」をしに来たと憶測している。ラズモフがナターリアの信頼を受けて自分の虚偽を保つことが苦しくなり、罪を告白しに来たという真実とは、はずれた想像である。真実には近づきながらも、どうしてもならぬ人間の誤りやすさが的はずれな傍観者を作り出している。

ラズモフがナターリアに対して口頭で告白するときの「私」の無知は、もう一度ラズモフを外から見直すための視点を読者に与えている。更に追

いうちをかけるように手記の形をとるラズモフの「書かれた告白」が続けられるが、劇的な場面と内省的な手記という二つの告白を並べることで、作者はラズモフを外面と内面から扱い、客観的な効果と主観的な心理を巧みに描き分けている。ここにも「私」の「あいまいな眼」の効果は威力を発揮している。「私」を一人称としての内省的な役割においてでなく、傍観者として利用したことで、告白の内面的性質を劇的に高揚することができたのである。

こうして、一巻から三巻まで、人物たち、ラズモフ、語り手と次々に「間違い」の呪いにかけていくのを読者は見てきた。そして、彼らが真実に向かって手探りをし、核心に近づきながらそれてしまう様を示され、呪いをかけられず真実を知っているのは自分だけだという優越感を堪能してきた。しかし、第四巻になるとこの優越性もぐらついてくる。ラズモフがスパイになったという事実を読者は第四巻になって初めて知る訳であるが、実際は第二巻ですでに警察のスパイとしてジュネーヴに遣わされたはずであった。コンラッドの老獪な時間の配列によって、読者はしばらくの間ラズモフの悩みがハルディンへの裏切り行為だけに基づいていると思込まれていたのである。四巻になって初めて、他の人物たちと同様に読者もまたラズモフのすべてを知っていたのではなかったということを思い知らされる。ここで、読者自身も今までの優越性を失って、いつの間にか「間違いのトリック」に巻き込まれてしまっているのに初めて気がつく。このトリックの効果は、先づ第一に、これによってラズモフのまわりに一挙に errors の世界を作り上げることができた。第二に、告白の直前にラズモフがスパイであったことを明らかにすることによって、読者の「驚き」(surprise)を一段と大きくする。この驚きが強ければ強いほど、読者は自分の上にもラズモフと同じ「間違い」の影を見て、自分自身の過ちの可能性にいつそうの恐れを感じるのである。第三に、これまでのラズモフの

行動の神秘性を読者が理解し、内面と外面との矛盾から起こる彼の心中での微妙なアイロニーを鮮明にする効果を持っている。コンラッドは、知らずに発した他の人物の言葉を、ラズモフの心の矛盾と罪の意識を触発するのに役立てている。ラズモフと他の人物との会話について、Guerardは余りに長すぎる「会話の洪水」(deluge of dialogue)であると指摘しているが、⁽⁶⁾作者はこの会話を通して、ラズモフの外面と内面との矛盾が次第に彼の心の中に浸透していく様子を劇的に描写しようとしているように思われる。ソファイア・アントノヴナとラズモフとの会話にその良い例が見られる。

「わかってくれますか。辛かった。恐ろしかった。悪夢のような日でした。その日だけではなかった」

「ええ、わかります。後で彼がつかまると聞いた時ですね。激しい戦いで仲間を失った後でどう感じるかはわかります。生き残ったことが恥ずかしくなります。……それに死って何でしょう。とにかく、死ぬより恥ずかしい生き方だってありますわ。」ラズモフは彼の胸の中で何か動くのを感じた。それはある種のかすかな不快な戦慄のようなものだった。(3巻3章)

話者の無意識の言葉によって、不意を突かれた動揺がラズモフを襲っている。友への裏切りとスパイ行為からくる良心の苦しみを、彼女はただ仲間を失った悲しみと見ている。「死ぬより恥ずかしい生き方だってある」という彼女の言葉は、そのままラズモフの心の矛盾を反映し、彼の良心への訴えになっていく。

また、ナターリアがラズモフに初めて会ったとき、彼女は自分の名前を言わずに、「ヴィクトー・ヴィクトー・ハルディン」と兄の名前を言った

きり絶句してしまった。この言葉を聞いてラズモフの心には、裏切った友ハルディンの言っていた「僕の魂は誰か他のロシア人の肉体に宿って戦い続けるのだ」という言葉が去来したに違いない。ハルディンが妹の口を借りてラズモフの良心を大きく揺り動かしたのである。同様に、ナターリアをはじめ多くの人物たちがラズモフに向けて発する「信頼」(confidence)という言葉の連呼は、彼に間違いの世界と自分との矛盾を思い起こさせていった。意志の伝達という言葉の機能を持たない世界の人々の無意識に発する言葉自体が、ラズモフの精神の矛盾を呼びさます役割を果たしている。ここにおいて、コンラッドのアイロニーは最高潮に達したと言えよう。

ラズモフはこの小説の中で、口頭と手記によって、ナターリアに二回、革命家たちに一回、全部で三回の告白をする。Frederick Karlは、ラズモフの革命家たちへの告白はこの小説の欠点となると述べているが、⁽⁷⁾ラズモフのナターリアへの二回の告白は、ナターリア、語り手、そして読者に対して、また革命家たちへの告白では、呪いにかかったすべての人々に対して、「過ちの呪い」を解こうとしたものであると解釈するとき、ラズモフのすべての告白の重要性が説明されるだろう。ラズモフは、その結果として、二重スパイのニキタに鼓膜を破られて音を失い、片輪になってしまう。自分を滅ぼすことによって、間違いの世界から脱することができたが、彼を待っていたのは音のない沈黙の世界であった。

コンラッドは、人々に徐々に影を投げかけてきた「間違い」を、「喜劇の世界の逆転」(comic reversal)として昇華させずに、最後にラズモフの告白という形で、悲劇的denouementを高めるのに用いた。またラズモフのまわりに「間違い」という喜劇的素地をめぐらせることで、人間を喜劇の中の悲劇的中心としてとらえようとしている。そして「間違いの世界」が、人物たちを、ラズモフを、語り手を、そして遂に遠くから客観的に見ていたはずの読者までも巻き込んでしまうことによって、ラズモフの悲劇

に種々の視点を与え、人間の予測し難い悲劇性を伝えようとしている。読者自身が、この物語を自分の身に起こった「間違いの悲劇」としてとらえるとき、ラズモフの悲劇はわれわれの胸に最も重くのしかかってくることであろう。

Notes.

- (1) Author's Note, 1920, viii
- (2) Ibid., ix
- (3) Joseph Conrad : Chance, p. 48
- (4) Douglas Hewitt : Conrad : A Reassessment, Cambridge :
Bowes and Bowes, 1952, p. 89
- (5) Albert Guerard : Conrad the Novelist, Cambridge,
Mass. : Harvard University Press, 1940, pp. 249—50
- (6) Ibid., p. 248
- (7) Frederick Karl : "The Rise and Fall of Under Western Eyes,"
Nineteenth Century Fiction, XIII, 1959, pp. 313—317